

## 抑圧と無意識の主体の倫理(要旨)

本稿では、精神分析の提出する抑圧 Verdrängung/refoulement 理論を検討する。精神分析における基本中の基本であるこの理論を、なぜいまさら取り上げるのか。だが、われわれの考えでは、この理論は、基本中の基本とみなされてきたがゆえに、精神分析を受け入れるか否かの踏み絵のような役割を担ってしまい、それ自体が検討されることはけっして多くなかったように思われる。そのため、われわれは、改めてこの理論を検討してみたいのである。

第一部では、フロイトにおける抑圧理論の変遷をみていく。フロイトは、はじめからこの抑圧と呼ばれる現象を直観していた。だが、彼はそれをうまく理論化することができない。なぜか。それは、フロイトの発見したもの、つまり彼がヒステリー者の話りのうちに聞きとったもの、それがひとつの知を形成するのに非常に厄介なものだったからである。

それでもフロイトは、抑圧理論を、メタ心理学的なしかたで提出しようとする。その最初の試みが、『夢解釈』(1900)の第七章であった。しかし、メタ心理学的理論の狙いとは裏腹に、フロイトは抑圧を単純明快なしかたで提出することができない。それどころか、ここでは性的なものが抑圧されるという仕組みをほとんど説明できていないのである。本稿では、その理由を、フロイトの発見したもの、すなわち無意識の性質と『夢解釈』時のフロイトの論者としての欲望の齟齬という観点から検討する。(第一部第一章)

このしくじりを経て、フロイトは 1915 年にふたたびみずからの理論のメタ心理学的な構築を試みる。このとき、抑圧は、『夢解釈』のときとは違うしかたで、つまり仮説として提出された欲動の、その運命として、理論化される。このような提出がどのような意義をもっているのか、この点を検討する。(第一部第二章)

いっぽうでフロイトには、メタ心理学的理論と呼ばれるべきものとはべつの理論がある。いわゆるエディプス・コンプレックスや去勢コンプレックスにかんする理論であり、フロイトにかんしてはこちらのほうが一般に浸透した理論であるといえるだろう。だが、これらの理論にかんしては、誤解の多いのも事実である。それは、往々にして、フロイトのいう性的なものにかんするものである。本稿ではこれらを実践的理論と呼ぶことになるが、ここでは、それをメタ心理学的理論と区別することでフロイト理論の正確な読みかたを提出してみたい。(第一部第三章)

最後に、フロイトが、症例研究において、出自の異なる二つ理論をどのように扱っているか、さらにオオカミ男症例を具体的にみていきながら、これら二つの理論から生ずる困難をどのように解消しているかを、検討する。(第一部第四章)

第二部においては、ラカンが抑圧理論をどのように再構築したかをみていく。ラカンは、

オオカミ男症例を取り上げながら、抑圧を言語活動と結びつけて再構築する。そのさい、フロイトがメタ心理学的理論と実践的理論という両方の観点から説明するために導入された事後性という概念を、言語活動のはたらきとして捉えなおす。また、抑圧を言語活動と結びつける過程でシニフィアン概念が彼独自のしかたで練り上げられる。それによって、言語活動にかんして欲望というコンテクストからアプローチすることが可能となる。そして、ラカンは、抑圧を、言語活動における欲望の観点から、大他者の欲望にかんして象徴化されえないものが生ずることの現象として理論化しなおすのである。(第二部第一章)

ラカンによる再構築は、フロイトのものとそれほどかけ離れたものだろうか。それについて検討するために、ラカンによる抑圧理論の再構築をもう一度フロイトの議論に送り返してみたい。そのため、フロイトのメタ心理学的図式とラカンのシニフィアン連鎖の関係性を探っていく。そうして、この議論から、ラカンによる抑圧理論の再構築がシニフィアン連鎖から主体が脱落するという現象のことであることが明らかになる。(第二部第二章)

第三部は、抑圧を認めることで、言語活動にかんするある通念が壊されることになるが、この点からはじめることになる。それは、言語活動における真理の問題である。話し手が嘘偽りなく語っていることであつたとしても、「そこに抑圧がはたらいている」とされるなら、その言表は真理ではなくなってしまう。この事態は、言語活動において真理をどのように捉えるかという問題を再検討するように促す。これは、ハイデガーが真理概念を考察したときの議論と交差する問題を含んでいる。また、ラカンが抑圧理論を再構築するのに参照としたのもまた、ハイデガーであつた。このようなことから、ハイデガーにおける真理と言語活動、ハイデガーのことばでいうならロゴスの関係を明らかにしていく。(第三部第一章)

ラカンによる抑圧理論の再構築は、シニフィアン連鎖の執存とそれと相関的にある脱-存といういいかたによってなされるが、これによってどのようなことがいわれているかをハイデガーのタームと検討しながら、明らかにしたい。そこでは、欲望の観点から言語活動が考察されることになる。この観点からすると、言語活動において大他者の欲望の知を象徴化できないことから、主体がその言語活動から脱落し、それによって言語活動において露わにならない領域が形成される。これが、抑圧の構造であるとされることになる。このとき、このような言語活動の構造は、われわれが通常おこなっているような言語活動による知の伝達について、新たな問題を提起する。それは、ことばを正しくもちいさえすれば、知を真理のまま伝達することができるという考えである。ラカンによる抑圧理論の再構築は、言語活動において、知られざる知のあることを示している。それは、知の伝達に主体的出来事のかかわる知の伝達である。だが、たとえばプラトンが教育することの困難に遭遇するとき、問題になっていたのは、じつはこのたぐいの知をどう扱うかという問題ではなかつたらうか。(第三部第二章)

ラカンは抑圧を、欲望の観点からみた言語活動において主体が脱落することであると考

えた。そうであるなら、語る存在であるわれわれは、この抑圧を免れることはできないのだろうか。それならば、精神分析は、このときなにをおこなうのか。この問題にたいし、ラカンは四つのディスクールというマテーマによって答えようとする。ここではまず、それがどのようなマテーマであるかをみていきたい。(第三部第三章)

また、ラカンの四つのディスクールのマテーマは、第二章において提出された問題、つまり主体的出来事のかかわる知の伝達あるいは知の創造というものがどういうものであるかという点にかんしても考えるきっかけを与えてくれる。ここでは本稿第一部第一章と第二章においてみたフロイトのメタ心理学的理論の変遷をこのマテーマで読みなおし、フロイトの提出する知が、主体的出来事を経て、それゆえにその知にたいしみずからがつねに倫理的態度を取りつづけることによってのみ存続するたぐいの知であることをみていきたい。そして、そのような知を伝達することにかんして、なにが重要であるのかということを考えてみたい。(第三部第四章)

以上の考察によって本稿は、フロイトの創設した精神分析もまた、ヨーロッパ独自の「思想」の営みのひとつであることを、知の伝達という観点から、明らかにする。